
始まり

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
始まり

【Nコード】
N1343A

【作者名】
ユウ

【あらすじ】
ちせとシュウジが付き合うまでのストーリー！。

ある日の昼休み

タケ「みんなすきな女っているのか？」

3人「はあ？」

ノリ「なんだよいきなり」

アツシ「俺はいるよ」

ノリ「誰だって好きな女くらいいるべや、なあシュウジ」

シュウジ「俺そーゆーの興味ねーから」

タケ「高校生なんだから好きな女の一人くらい普通いるだろ」

シュウジ「そーか？」

アツシ「シュウジも気になる女ぐらいはいるべ？」

シュウジ「・・・少し可愛くなって思ってる女なら」

3人「まじ!？」

シュウジ「なんだよお前ら、普通はいるとか言ったくせにビックリすんなよ」

タケ・ノリ「だって・・・なあ」

アツシ「シュウジに本当に好きな女がいたなんて普段から一緒にいる俺達と思うわけねーべや」

シュウジ「勘違いすんな!! 好きってわけじゃねーよ! ただ可愛いって言ったただけだべや」

本当に好きとは違うと思った。

あの日以来、僕は女を好きになることはなかったしこれからもない
と
思
っ
て
い
る。

ノリ「・・・そんなことより誰なんだ？」

シュウジ「アホ!! 教えるわけねーべや」

僕が可愛いと思っていたのは、アケミといつも一緒にいる小さな女の子だった。

その時キンコンカンコン
5時間目の鐘が鳴った

シュウジ「鐘もなったし教室もどるべ」

ノリ・タケ「シュウジの好きな女後で教えろよ！」

アツシ「俺も気になるな、シュウジの好きな女」

シュウジ「好きってわけじゃねーって言うてるべ！はやく教室戻るぞ」

3人「待てよー置いてくなくよシュウジ」

・・・数日後

今日も普通に学校に行き、靴を入れようと下駄箱を見ると

シュウジ「なんだ？この紙」

開いて読んでみるとその紙には小さな丸い文字で何度も『ごめんなさい』と書かれていて、

そして最後に『私と付き合ってください』と書かれていた

シュウジ「まじかよ・・・」

シュウジは書いた人がアケミといつも一緒にいる小さな女の子だと分かりさらに驚いた

自分はアケミをとおしてしか話した事すらないし、自分が話し掛けるとその女の子は下を向いて頷いたり、
ちよっとした返事しかくれなかったから怖がられていると思っていただけからだ。

自分は相手に対して嫌な気持ちはない。どちらかというと好きなほ

うだ。

しかし自分が恋愛出来るか不安だし、何より今まではそーゆー事から逃げてきた。

色々考えて相手の女の子に返事を返した

自分が出した返事はOK。

これは今まで逃げてきた自分を捨てたかったからなのかもしれないこの日から僕と僕の彼女であるちせのお互い恋愛が不器用な者同士の恋は始まった。

ぼくたちは、今日から彼氏と彼女の関係になった、僕が返事した後帰ろうとしたとき

「あの・・・」

「んっ？なに？」

「あっ・・・えっと・・・なんでもないです・・・ごめんなさい」

「そーか、ならはやく一緒に帰ろうぜ」

「えっ・・・あ、あたしとですか？」

「当たり前だべ、俺達付き合ってたんだべ彼氏と彼女だべや」

ちせは顔を真っ赤にして

「そ、そうですよね」

そして僕たちは一緒に帰った

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

長い間沈黙は続いていた

「明後日テストですよね・・・」

「そーだな、勉強しねーとな」

「シュ、シュウちゃんあ、あの・・・よかったら一緒に勉強しませんか？」

ちせを見るとかなり緊張してるそして勇気を振り絞って言ってるの

が僕にでも分かった

『一緒に勉強するってことは、どっちかの部屋でふたりつきりなるって事になるよな』

『俺はなにを考えてるんだ？ただ一緒に勉強しようって言ってるだけだろ』

一人で考えていてしばらく沈黙が続いてしまい返事もせずにいた

「ごめんなさい」

「えっ・・・？」

「シュウちゃんなんて呼ぶのはまだ早いですよね・・・。アケミに、恋人同士になったらシュウ君なんてよんだらしつれいだ！だっていわれて・・・アケミに騙されちゃったのかなあ・・・」

ちせは弱々しく言った

「いや、別にシュウちゃんって呼んでもいいよ。俺も君の事ちせって読んでいいか？ちせちゃんとかちせさんとか俺の柄じゃねーし」

「もちろん！いいですよ出来れば君って呼ばれたくはないです」

「そーかよかった」

僕は、勉強の話は流してしまった。自分自身告白のあとでドキドキしているから部屋でふたりきりになると壊れそうな気がしたからだ。それに、ちせはもう勉強の話をしなかったからそれでいいと思ったんだ。

またしばらく沈黙は続いた

そして、十字路についた、ここでは僕は右にちせ左に行く

「ちせ、じゃあなまた明日な」

「シュウちゃん！あの・・・明日から一緒に学校行きませんか？」

「俺はいいけど・・・ちせたしかバス通だろ歩きでもいいんか？」

「一緒に登校できるなら歩きでもいいです」

俺は顔が真っ赤になった

「そ、そーか、なら待ち合わせはここでいいよな」

僕は僕がここにつく大体の時間を待ち合わせの時間にしようと言った
「はい、分かりましたじゃあまた明日」

僕は十字路でちせと別れてから何度もちせのほうを見た。

ちせも何度もこっちを見ていて何度も目があり、そのたびちせの顔が赤くなっている気がした。僕もそうだったのかも知れない

次の日僕は待ち合わせ時間より早く着くように家を出た

着いたときちせはすでにいた

「おはようシュウちゃん！はやいね」

ちせは昨日より恋人らしくなろうと、普段友達に話すように話し掛けてきてくれた

「おめーのが早いべや」

「そうだねごめんね」

沈黙は相変わらず多いながらも、話ながら歩いていると地獄坂にいた。

昨日は下りだから気付かなかったがちせは体力が異常になかった

しばらく歩いてちせを見ると横にはいなくかなり後ろで小さいちせがさらに小さく見えるような位置にいたちせが追い付くまで僕は止まった

そしてちせが追い付いて

「はぁはぁ、ご、ごめんねシュウちゃん」

「バカ！おせーよ！遅刻しちまうべや」

「ごめんなさい」

そして再び僕も歩き始めてまたしばらくしたて後ろを見るとまたかなり離れていた

また僕はちせを待った。ちせは追い付いた

「もうゆっくり行くべ、今日はどーせ遅刻だべや」

「ごめんなさい」

ちせの目には涙が溜まっていた

そしてちせの歩くペースにあわせて歩いて再び学校に向かった。

予想通り1時間目が始まってから少したって着いた。教室が、なぜかさわがしい開けてみると

アツシ「シュウジおせーよ」

シュウジ「授業は？」

アツシ「今日1時間目の先生遅刻だってさ、LUCKYだったな」

シュウジ「そーいやノリは？」

アツシ「今日は休みらしいぜ」

タケ「やっときたかー。バスから見えたぜ、ちせちゃんと仲良く登校してたな どーゆーことだよ！」

シュウジ「なんでもねーよ」

すると先生が来た

タケ「後でどーゆーことか説明してもらってからな」

シュウジ「分かったよ・・・」

昼休み 屋上

タケ「いつからちせちゃんと付き合ってたんだ？」

シュウジ「昨日からだよ・・・」

アツシ「どーしたんだ？女には興味がないみたいなさ言っておいて」

シュウジ「仕方ねーだろ！俺だって自分が可愛いと思っている女の子に告白されたらOKされるべや」

タケ「ってことは、前可愛いって言った女の子はちせちゃんかー」

シュウジ「しまった・・・」

タケ「シュウジもなんだかんだ言って普通の男ってことだな」

シュウジ「うるせーもうお前らには話さん。教室戻る！」

タケ「まてよシュウジゝ悪かったよ」

そして教室

ちせ「朝はごめんねシュウちゃん」

ちせは下を向いて言った

俺は自分でも自分の口の悪さは分かっている、そしてそれがちせを朝傷つけたことも・・・

シュウジ「いーよ先生ちようどいかなかったし。明日から10分早く待ち合わせるべ」

ちせ「じゃ、じゃあ一緒に登校してくれるの？」

シュウジ「一緒にガッコ行きたいんだべ？だから一緒に行くべ」

ちせ「ありがとシュウちゃん」

アケミ「まだ付き合って1日なのに仲良いねおふたりさん」

シュウジ「そんなんじゃないよ」

そうただ傷つけないようにしているだけなんだ

アケミ「ふーん、くれぐれもちせに変な事はすんじゃないよ！」

シュウジ「するかよ!!」

ちせ「そうだよ、シュウちゃんはそんな人じゃないよ」

アケミ「はいはい、シュウジよかったねえシュウちゃんって呼んでもらえて」

シュウジ「おめーがちせにふきこんだんだろ！」

アケミ「私は二人がうまくいくためにアドバイスしてあげただけだよ」

シュウジ「余計なお世話なんだよ」

アケミ「はいはいごめんなさいシュウちゃん」

シュウジ「てめー死ねよ10回ほど」

そして疲れたせいもあり話すのが嫌になったので僕は席について外を見ながらボーッとしていた

そして今日も終わった

数日間ぎこちない関係が続いていた

数日後僕はぎこちない恋愛に疲れてきて別れようと思いちせをある

場所によんだ

そこでちせは心の中にためていた気持ちを口にだした僕も今まで隠していたことをさらけ出してしまった・・・

そしたら何故か自然にぎこちなさは無くなり僕達は本当の恋人になれた

— E N D —

(後書き)

第2作目前の続きみたいなもんです
ちせとシュウジの物語は付き合ってから5日目から始まっているの
で付き合った直後をイメージしました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1343a/>

始まり

2010年10月10日03時58分発行